

「日本に生まれ育ったニューカマー2世の継承語への意識と継承語学習への過程—神奈川県営団地で「外国につながる子ども」として育った青年の語りから—

Heritage language awareness and the processes of heritage language learning among second-generation newcomers born and raised in Japan: Narratives of those who grew up as 'foreign-linked children in public housing in Kanagawa prefecture

中家晶瑛（お茶の水女子大学）

「外国につながる子ども」は、親に連れられて学齢期に日本に来た子どもとされることが多いが、彼らは、学齢期に来日し、日本語学習支援を必要とする子どもでだけであるとは限らない。そのなかには、外国出身の両親のもと日本に生まれ、日本社会で育ち、日本語を母語とするため、日本語学習支援を必要としない子どもも含まれることもある。

現在に至るまで「外国につながる子ども」に対する言語教育は、日本語教育・継承語教育・母語教育の研究実践が数多く蓄積されてきた。しかし、彼ら自身の多様な生まれ育ちの経緯への考慮は十分であるとはいえない。例えば、田・櫻井（2017）の継承語教育実践では、子どもの言語能力に着目したことから、外国出身の両親のもと、学齢期に来日した子どもであるニューカマー1.5世と、外国出身の両親のもと、日本に生まれ育った子どもであるニューカマー2世を同列にみなしている。他にも多くの研究では、子どもの言語能力に主に着目してきたが、子どもの生まれ育ちの経緯とその相違は、個々人のアイデンティティに関わり、そして継承語の学習動機にも関わると推察する。よって、彼らの生まれ育ちの経緯やコミュニティ、社会との関わりなどの文脈を捉え、日本に生まれ育ち、日本語を母語とするニューカマー2世の継承語学習の様相を広く検討する必要があると考える。

そこで本発表では、日本で生まれ育ち、日本語を母語とするニューカマー2世の継承語への意識の変遷と継承語学習への過程を、コミュニティや日本社会との関わり等周辺的な文脈を踏まえて考察することを目的とする。調査対象者は、「外国につながる子ども」が多く居住する神奈川県営団地で、日本で生まれ育ち、日本語を母語とし、自らを「外国につながる子ども」とするニューカマー2世の弓佳さん（仮名）である。インタビューから得た彼女の語りを、テーマ分析のハイブリットアプローチ (Boyatzis, 1998)を用いて探索的に分析を行った。